

ろくべん館だより Vol.41

『水をめぐる話』

隣家の植込みに隠れるようにして「金毘羅大権現」の石碑が置かれていたことに気づいたのは、つい最近のことだ。ああ、こんなところにもあったのか。そういえば、このそばには昔「水車(くるまや)」があったと聞いていた。

村内には、いたるところで金毘羅様の石碑を見ることができる。金毘羅様は水を守る神様、ときには火の神「秋葉大権現」と並べて祀られている。火と水という、ひとの暮らしに欠くことのできないものへの信仰が、ここには深く根付いていることを思い知らされる。

大河原は二百年前には文字通り、広い河原が広がっていた。大磧神社は、今では「たいせき神社」と読むが、かつては「おおかわら神社」と呼ばれていたと、物識りのおばあさんに聞いたことがある。「磧」という字は「かわら」とも読み、水辺に砂や石がごろごろしている所をいうのだそうだ。

江戸時代に新田開発され、川除け工事で川の流れが人工的に変えられるまでは、人家は川のそばに建てられることはなく、出水しても安全な山付きにかろうじて水田が作られていたという。それまでは、川は渇水期には広い河原の中をおとなしく流れ、出水時には川幅を一举に広げ大きな岩を転がしながら、暴れ放題に流れていたのだらうと想像する。

この二百年の間に、川の姿は大きく変化した。人口の護岸が張られ、川床も固められた。かなり上流まで遡って堰堤が築かれ、川が海に流れ込むまでにはいくつもの大きなダムが川を堰き止めるようになった。ここで問題が起こった。

川が海へ運ぶ土砂の量が減り、砂浜の堆積と浸食のバランスが崩れてしまった。ダムに止められた砂が堆積して、下流に流されなくなってしまったからだ。海岸の浸食が進み、ある場所ではウミガメの産卵場所が失われた。また、ある場所では、海岸線よりはかなり離れた内陸にゴミを埋め立てたのが、まさかの侵食によってゴミが流れ出すという事態になった。

この対策には、上流のダムに溜まっている土砂をダンプカーに積んで、海岸まで運ぶという応急の措置が取られた。今ではダムから土砂を流すための方法が、いろいろ考えられているようだ。その一つが、現在小渋ダム上流に造られている排砂バイパストンネルだ。ダムに溜まる前に、ダムより下流に砂を流してしまうという方法。一度人の手で形を変えられた川は、放っておいたのではうまく循環できなくなってしまったわけだ。

去年、愛知県田原市から観光に来た人が、田原市周辺の漁獲量が減ってしまったと話してくれた。理由として考えられるのは、海に川から流れ込む養分が減ってしまったからだということだ。食物連鎖の基になる植物プランクトンや海藻が育つには、窒素やリンやケイ素といった肥料分が陸上の植物と同じように必要となる。中でも欠かせないのが鉄分なの

だそう。それを海に供給する重要な役目を担っているのが、山の木の葉だという。落葉し腐食が進むとフルボ酸というものができ、それが土や岩石の中の鉄分と結びつくとフルボ酸鉄というものになる。フルボ酸鉄は植物が直接吸収しやすいもので、植物プランクトンや海藻の成育に重要な役割を果たしているのだそう。川が海へ運ぶのは、ただ単に土砂だけではなくたのだと知った。

「森は海の恋人」という言葉を聞いたことはないだろうか。三陸で牡蠣の養殖をしていた畠山重篤さんという人が山から海への循環に気づき、山に広葉樹を植える活動をしているという。私たちの村の山の現状を思う。川の現状を考える。はたして、この目の前の川が海に至るまでの水の旅を、そんなに広い視野で見たことがあっただろうかと気づかされた。

人に利するために川の流れは変えられた。しかし人の利は、けっして自然の利には重ならない。それが、結局のところ人に思いがけぬしっぺ返しとして還ってくるようだ。村のいたるところにある「金比羅様」や「水神様」「竜神様」の碑は、古来から水を畏れ、敬い、感謝してきた山の民の思慮深さの証しなのではないだろうか。南アルプスの大山塊に穴を開けようという大事業が、展開されようとしている今、ただ水の神に手を合わせ祈る。